

清流通信「四万十川物語」第21章 (H11.1.10)

送信者：高知県四万十川対策室 tel(0880)23-9795 fax(0880)23-9296

～北の友からの年賀状～

新年あけましておめでとうございます。21世紀まで2年を残すだけとなりました。皆様は21世紀の扉をどこで開けられますか？

さて、今日は私に届いた年賀状のお話です。私の注釈なしに、その要旨をご紹介します。

『漁民による植林活動【森は海の恋人】運動も10年が過ぎました。ブナ、ミナウ、トチ、クリなどの広葉樹の苗は、兎やカモシカにその芽を何度も食われながらも、めげずに翌年には新芽を再生させ、彼らの口の届かないところまで背を伸ばしています。その生命力には驚かされると同時に、生きる勇気さえも与えてくれます。十年間で植えた木は二万本に達し、大きな森になりつつあります。目標は十万本の森です。あと何年間かかるでしょう。今年も6月第一日曜日を植樹祭と決めておりますので、皆さんも「牡蠣の森」に植林に来てください。

森が大きくなるにつれて、気仙沼湾に注ぐ大川も年々きれいになってきました。川ガニやウナギなども姿を見せるようになってきたのです。そのためでしょうか、牡蠣や帆立貝の成長もよく濱は活気づいています。(中略)そんな中、リアス式海岸の「リアス」という大切な言葉の意味を知らないでいました。「リアス」とはスペイン語で「潮入り川」という意味です。私はその本場スペイン・ガリシア地方へ二人の息子と出かけました。それは、パンドラの箱が開くとはこういうことかと思わされるような新発見の連続でした。その模様は、文芸春秋社より「リアスの海辺から」という題で5月に出版されます。ぜひ書店で手に取って見てください。』

この年賀状の送り主は、宮城県で牡蠣養殖をされている畠山重篤さんという方で、フランスの自然海岸での牡蠣生息状況を見て、日本で初めて森と海のつながりを提唱された漁師さんです。畠山さんの「漁師が山に木を植える」という言葉とともに、今や「森は海の恋人」運動は全国に浸透し大きな影響を与えています。四万十川流域でも「清流の森づくり」や「源流点の森づくり」を実践していますし、四万十川河口海域にクジラが生息している状況から、「クジラと出会える森づくり」のような名称で、継続して取り組みたいと考えています。

畠山さんは今、この運動を子ども達に理解いただくため、教科書への掲載に取り組んでおられます。フランス、スペイン、北の宮城から南の四万十川へ！畠山さんが蒔いた芽はどんどん広がっております。この出会いをいつまでも大切にしていきたいと思っています。

(文責：市原利行)

畠山 重篤氏

・宮城県唐桑町字西舞根133-1

(有)水山養殖場主

牡蠣の森を慕う会代表

・TEL:0226-32-2174 FAX:0226-32-3269



●源流点の森づくり(H10. 10. 25: 東津野村)

次章(2月10日発行)は、「四万十菜舎」を予定しています。